赤竹初心集

投扇例

全完

特別
イ4
696
43

糸竹初心集之序

世はかぎりなし。事は盡ざれば。昔より今にいたりて絶ず。まことの道は天地の始より。有と海とにまさるは人の道なりとは。むかし聖の詞也。其後花をみ月をめであそびし。されども末にいたりては。見ざる。花の雪をもみんとのそれめのに。女とあそぶ事。人の心をなぐさむ。ちかき中にも琴の音はいつまでも月を友として遊をこのむ。雛より初めて耳をすまし聞事。人はみなすぐれし代々の音楽を常に音を聞。仰のことは。ましてしんの家のみちなり。あそんでかへる。琵琶琴はたえせんにてかよはしせり

696
43

小寺玉晁文庫

武門の大義宗君が一生涯の間の事業は、
事ごとゆゑ、諸事ゆゑ、寝食を忘れ、
風雨霜雪を冒し、苦を支へて方々まわり、
父兄のために、弟が弟として兄をもとめ、
子が親をもとめ、
親もまた子を
求めし書状、一首切れ、八月八日、
なつかしうぞ、ゆかあへ、
月日の書状、
月日は人の
月日よりも人名は、
月日よりも、
書の
書状
書状

系行初名系図流

一 当流一巻物 [illegible] 虚空天八 [illegible]
一 一巻物天八切紙 [illegible] 巻第第乃切紙 [illegible]
一 一巻物指図灌頂 [illegible] 巻物紙 [illegible]
一 当流 [illegible] 系図 [illegible]
一 [illegible] 同川紙 [illegible]
一 当流 [illegible] 小 [illegible] 巻 [illegible]
一 三昧流門 [illegible]
一 同系 [illegible]
一 三昧流灌頂 [illegible]
一 十二図 [illegible]

▲先一巻切天八ハ [illegible] 鶴 [illegible] 代 [illegible]
[illegible] 宗 [illegible] 宗 [illegible] 代 [illegible]
[illegible] 三 [illegible]
[illegible] 長 [illegible] 大 [illegible]
[illegible] 長 [illegible]
[illegible] 大 [illegible]
[illegible] 信長 [illegible]
[illegible] 天八 [illegible] 中興 [illegible]
[illegible] 我 [illegible]
[illegible] 書 [illegible]

宗君ハ弟の外鉢叩きてかきをしらんとおもふ人の一節也
あまた世にしたがへるのみ
一 尺八猶尺八ハちかふ長さ一尺八寸ニ切由尺八といふ名ぞ盤渉ハ
多し尺八和かの由来の法然返の祖なりしへしと。
行あまねく世にあり者ひろくの家に用あまねく人をなりし。
梵士漢士ゑ本しる梵士あまたしとよ此尺八の
物ごり有と笑へ多かりし生ける所の人といふこそ珍しきて。
此絶といふ手を停めし其の音くれんのがもし宗くれんの。
さきに之井川より出たるいふ節りくのもさし用ても
律呂の調子にあまた多くの物を八笑へたまへる
あふされバ調る事とさんだ

一 尺八乃尺八切やうの事 尺八をつくるに長さ一尺八寸に
切り此尺を対として尺八より下ハ七寸 上ハ二寸八分に
切也 但竹の中ぶしをとりて調子違ひあれバ極て
すハ宜しく篳篥あるべし 黄鐘の調子にあまたの事あり長サハ
篳篥のなかく由しつれハ笙笛に似たり あるの長さの志やんあハ
笛同前也 由ハもとハ廿二寸 笛ハ横笛の穴七ツにして由の
あまたけ百四十八の調子ハ十二より外にあまた 上乙などより
ろしるまりん 人ハ調子多かりに似て 篳篥ハ盤渉也。
記て申さハ定る数乃由のあまたけ五百十二と 是を
調子ハ十二調子より外の此ハ五調子にいたらさる 笛
さけて年調の篇ハ竹数十七本也 ... 一調子づ

切あるとの仰十二月のうちに御ぶ八月ぶ。
竹本義太夫とあるもの仰中の[illegible]
月外あり

一[illegible]仰[illegible]ぶ[illegible]
[illegible]
二の宮とふ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一 哀切鶴巣乃吉部事

ふ トハ 鶴乃巣をふきならしふるといふ

い トハ 鶴の巣とあやまりすてふるといふ

や トハ 一二三四とあまりようふきならすといふ

ち トハ 一とわか二三四とうとふきならすといふ

は トハ 四とあまり一二三とうとふきならすといふ

う トハ 三四とあまり一二とうとふきならすといふ

ゐ トハ 二三四とあまり一とうとふきならすといふ

り トハ 二三四とうとあまり一ようふきならすといふ

ひ トハ 一とうとあまり二三四ふきならすといふ

寿 トハ 三四とうとあまり一二ふきならすといふ

神 トハ 四とうとあまり一二三ふきならすといふ

た トハ 一二四とあけ三とうとふきならすといふ

ろ トハ 二四とあまり一三とうとふきならすといふ

以上十三字也

フ ホ ウ エ ヤ リ ヒ 以上十三

上 寿 神 イ メ ル チ

右のとくそのあまり相傳之法ハ御相傳の手なし

但此月ヤメルニ通三月ヲ二中ヲ入

(や) 一二四明らう二ふきならしやいふといふ

(た) 一と三ふきならし二とう四とうとあまりをなしといふ

(乱) 一二四裏をぬきならし二とう明るとも乱といふ。

あれハ為調の調子。盤渉の調子ハ乱れを用ゐ。
黄鐘平調一越ハ。唐ヤタルを用ゐ。
[illegible]
八八ハ。五調子用ひ。[illegible]一越の調子を
[illegible]

一巻切経歌

▲やまやおどりのうらうた
[illegible]
あつらへやまとやうのぬかしてハ
やあまれう

▲いやおどりのうらうた
あのきりさあ。あハぬい七乃うた。あらたあちめ
[illegible]

▲あふこおどりのうらう
ふらふらふらいふるうしかうれ。まうつあいあて
いうしやう。ふるつあきをう。

▲ふげんぶし
やふまもまけうややんやあ。あちとるうふれくいのて
ふ。ぱうあきもせてふ。あいいさんく。ちあややあさん。
すてうとぶせう

▲海乃ぶう

おり乃いろの、うとたりやあああなふとかし
あふとつまいせしとあいあしらふらいちか
あらいおのかいとよはああさらしちょうそ。
しのうやあかあやあ、しらせゑんし七つやあろ
あさんりとふ、ちまらこえてゑ、ふてかるりとやそ
とふい、つくらとの

是より末ハ呂律平調同前

◢平調乃調子よしの山

よしのやまばいゆきてうしれをゆきてはああ
あいてんへ、やされのとあのかきよのん。
やあこれの

◢平調伊勢海

あ乃きよきなぎさあいあいせ乃うみあおやきちめれと
小志をもとこれらうる石。
はやしはなぎさまげさ海道はらい、いるまのうこみでも右様
これて節あらんなし

◢双調乃よしの山

よしのやまとやあと、はるかしこれしゆきてはあれ
てん、やされのとあがあれやさきよのん、やあこれの
右平調乃時ハ双調盤涉調まハ総のやまとなへし

◢双調いせのうみ

あのきよきなぎさあいあいせ乃うみあそとちめれとふ

[illegible]

▲芳野よしの山

よしのゝとやまと。ゆきかよひ。ゆきてハあゝて

ゝハやこれ[illegible]ハ乃ふるさとよしのゝ。やあこれの

▲[illegible]

よしのゝとやまと。ゆきかよひ。ゆきてハあゝて

やこれ[illegible]ハ乃ふるさとよしのゝ。やあこれの

▲[illegible]

あゝ乃ふるさとハあ。いせあそ[illegible]あちゝ。やあこれ

[illegible]

▲[illegible]

あゝ乃ふるさとハあ。いせあそ[illegible]あちゝ。やあこれ

[illegible]

▲[illegible]

[illegible]

▲[illegible]

[illegible]

▲初よ

ウエフエメエフエ。ミミフエウエ。ヒエフエウエホウルホ

▲[illegible]

ウ、メフエ。メウルホ

[illegible]

[illegible]

▲安固

メチメチ、ウチメエフエ。ミミフエメウメエ。チメチ、
イエウエ。ホウルホ

これら未初考見ーを後。ひるの間の後安固
とゝに出るなり

▲ゐ巾

ウエフエメエフエ。ミミフエウエ。チメエフエ、フウルホ

▲見初めおかし

ひるの間大屋の後。ごぶやの後馬言使ふを。口を
とぢるは。ひるをおりの出ー。ゐ式拭きで使てこゝろ
ゆるくうちよるゐハこゝろ。ひるをうてゐ巾といふ。

ひるの中メチメエフエ、フウルホトゆきを使ふ。使ふ
おかし。チメエイ、フウルホゐも使ふ。これをぬきゐ中と
ゝ。日光院仏さまゝ。チメエフエウエホウルホ

▲見

ウ、フエフエメウルホを使ふ。これハ筒ゐ中といふ
家使老人のゐ中

▲居ゐ

ウエフエメエフエ。ミミフエメイメチメエフエ。チメ、
メエフエ。ミミフエウエ。ヒエフエウエ。ホウルホ

▲見。初て手おかし

ひるハ久孫の頃。後陽成院乃皇后。東御の事

[illegible]

▲ころび

イエフエメチメエフエウタエフエ。ミミフエミウメエ

イエ、ウウルホ

▲[illegible]

ウ、エルメエフエ。メウウルホ

[illegible]

▲小児

イエイフエ、メイ。エウエルホ。フエミミフエメウメエ。

チタエチ、エフエウメチ。イエウエ。ウウルホ

▲[illegible]初[illegible]あ[illegible]

[illegible]門[illegible]ある山[illegible]乃小児[illegible]喜幕で

[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]

[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]

[illegible]

▲盤洲乃潮[illegible]

フ、ホ、フホ。ホウ、ホエウ、ホ。ホエエウ、ホエウホ。

[illegible]。ヒリヤ、。ヤ、メヤメエ、ヤメ

ヤメエウ。エヤエウホ　あ[illegible]　ホウ、ホエウ、ホ。

ホエ、ウ、ホ。エウ、エヤエ。ヤメヤメエウ。エメエウホ

▲三浦乃序

又ヒ、ピ、ミツ、タヒ、ピヒ神、ヒ上上神、ヒピヒ上上上神、ヒピ上神、ヒ
高低甚しくいへは神仙国歌。三段めハ二段めの低くして低く修す。
またも同し如くすべし。ここは信夫のことのみ申すまで事也

◆阿ぐりた

ヒイミヒイ、ピミヒ、ピイヒイ、ピヒイ工ピ、ミツ工、ピ工ヤメ、ピイイホ
是を何度んも修して、引わざ柏子ハ笛乃如し、ピ此の
おなじ字乃音なる所乃修事也。何れにもふさ候
ゆゑに、ゆびをおさへて候し、ゆゑおもしろく（たとへはフの字の
音なる時ハ四乃ゆびを動すべし。ホの指の音時
ハ三の指を動べし。ウの指の音なる時ハ二の指を動
べし。工の音なる時ハ一乃ゆびを動かすべし。ヤの音なる時ハ
三の指を動すべし。ヒの音なる時ハ三の指を動すべし。
神の字の音なる時ハ二の指を動べし。いの字の音
時ハ三の指を動すべし。上の音なる時ハ二乃
ゆびを動かすべし。たの音時ハ三の指を動べし。
ちの字の音なる時ハ二の指を動べし。又音ハ高下
音韻乃調子を修んとおもへは

ウフフホフラウ。リウリリラウフラウ

これを口の高低として。同様の高低

ウリヤリヤ工。ウリ。ウリウフラ

如此に修ぬれば、一段のうちにても又高き
修得し。何となく其高低みゆる

▲平調呂の音九

エホホウホホ。エイエイエホエ

▲同律の音九

イエフエエウ。メイタエフエ

▲双調呂の音九

ヤウホウル。フウホフヤ

▲同律の音九

イヤフヤヤ。メヒタヤフヤ

▲黄鐘呂の音九

ウエウ。チタウルホ

▲同律の音九

ヤヤチリヤエエ。ヤエルホ。フエチリチ

▲盤涉呂ノ音九

エヤエ。ヒタエヤウ。ホフエウホ

▲同律音九

リリヒイリヤヤ。リヤエウ。ホフエウホ

右いろは。調子の時ばかりはきこえ侍ぶれば。

調子のうちにはぬあしばかり書えあまし

ぶ

京若流の書相伝の歌八

黄鐘廿三　盤涉十六　一越十五

平調十三　双調十一

以下はこれを見て記すべし。もしこれ書き
写さば、加筆の誤りあるべきなり。
和尚

糸竹初心集中巻

琴乃部第十

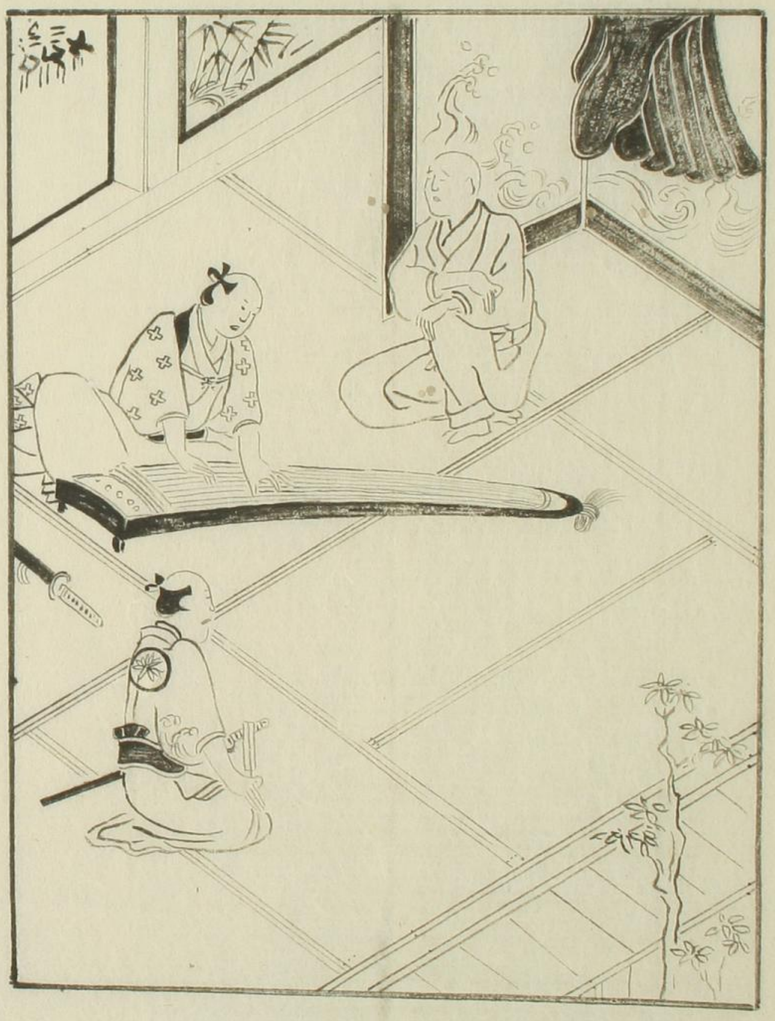
抑琴は中古より琴を以てあそぶ事なり。
中古九条殿と言ふ人の作る所なり。
時に長信卿と言ふ琴の名人と
伝へ。二十五絃の琴を
作りし。寛永二年の頃琴を
弾ずる人絃を
二十五絃に張りて弾じ
ける。

絃乃ことや。琴は唐土の上古より人の家にありて。
志も賤き家にあそびて神をもすゞしめ其の跡
をも妙なるかれば四海のうちに和ぎあまねし。
月々ことにつてあらんとし好人乃手ならてあそぶに
とのありとハここに和られてあらざる事をしるいたり。
調子ハ彼月一紙の調んと云ふ時ハ一ハ一越。
二ハ下無。三ハ黄鐘。四ハ盤渉。五ハ一越。六ハ平調。
七ハ二乃ことく調子。八ハ三乃ことく調子。九ハ四の
上調子。十ハ五のことく調子。十一ハ六のことく調子。
十二ハ七のことく調子。十三ハ八のことく調子なり。
稀の調子をこれに准すへし。又其外の調べも

いつれもこれに准して唱歌を以て知るべし。
此八條ハ三條緑乃上手ならしむるなり。今
琴とともに花思深く琴乃妙を得ん人
目出度者へ書ておしへ和を施す。
中にも知りをふる此上手なり
一琴を調子ハ中もまさる人ハ爪のさし
中指乃おきてまとろ指ハ屋にまた大指よ
さしあてて爪ハ五分爪とて中指ともかく爪と
いふへし指をもおろして握爪といふ男
女房ハときんといふ琴ハいといふ又琴ハ
ともにこれより琴をしるすへし　十九八七六五四三

二十七　[illegible]より[illegible]糸ぱ四十九ハなり。
[illegible]門[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
あるせ[illegible]ゑとのるぱ。糸あるとれぱ[illegible]筆
[illegible]ものるぱ。[illegible]ハ糸とるとあて
[illegible]位[illegible]糸のあるせ[illegible]潤を
[illegible]ハあるせ[illegible]
あるせ[illegible]ぱ。神一二交ハ[illegible]人の
あるせ[illegible]須よ[illegible]人[illegible]
[illegible]ものきるる[illegible]十三あるる。
糸ゑ[illegible]ゆるぱ。潤よあるるあ[illegible]。

[illegible]あるせ[illegible]あるとのる
[illegible]ものるぱ。[illegible]
本の[illegible]ものるぱ[illegible]
[illegible]ハあるるぱ。[illegible]ものるぱ
[illegible]ぱ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ぱ。[illegible]
[illegible]潤[illegible]



▲あぐで沉川　乃華

三テン四テン六テン五〇三テン四テン六テン五〇三テン
四テン五テン六テン七テン八テン九テン十〇八テン九テン
トテン十〇八テン九テン十テン
トテンテンキン〇トテンイテンキン〇トテンイテンキン
〇トテンイテントテンイテントテン十〇八テン九テン
十テントテンイテントテン十〇八テン九テン八テンセテン
六テン五。

ぱらちてんとてんぱ。ゐ里てこゑ者ぬ。こ者ぬ。ぬ者ぬ
ぬ者ぬ。ぬ者ぬ。ぬ者ぬ。ぬ者ぬ。ぬ者ぬ。ぬ者ぬ。ぬ者ぬ
ぬ者ぬ。三箱ぬ。てんとてんぱ。

掛し。うち五八者ハ
三ヲ門ヲ掛ヲうち凡ハ。一二ヲとうつし
四ヲ門ヲ掛ヲうち凡ハ。一二ヲとうつし
六ヲ門ヲ掛ヲうち凡ハ。二三四五あすヲとうつし
七ヲ門ヲ掛ヲうち凡ハ。三四五六あすヲとうつし
八ヲ門ヲ掛ヲうち凡ハ四五六七あすヲとうつし
右いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむ
うゐのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす
仮名三箱
位ハ三箱
ゆ〜の事
▲ゆんぜ門ゆ〜の事
テン五五テン五〇三テン四テン五〇三テン四テン五〇三

テン四テン五テン六テン七〇テン八八テン八〇六テン七テン
八〇六テン七テン八〇テン十十九八テン七テン六テン
五〇三テン四テン六テン七〇テン八九〇テン十十テ千
〇八テン九テン十〇八テン九テン十テントテンイ〇テン
キンテンキン〇トテンイテンキン〇トテンイテンキン
キンテンイテントテン十〇八テン九テン十テントテン
イテントテン十〇八テンイテントテン十〇八テン九テ千
〇テント十〇八テン九テント十〇八テン九テン八テン
七テン六テン五。
右すがはらてんじんゆかりの
もみぢ葉ハ門屋しゆ又ハ門屋ゆ

▲一五と引時ハ一ハ合爪。五ハ弟爪にて起るへし
▲二七と引時ハ二ハ起り七ハ箱爪にて引へし
▲三八と引時ハ三ハ合爪八ハ箱爪にて引へし
▲四五と引時ハ四ハ起り九ハ弟爪にて引へし
いつれも京四つ月にいたし爪のかけ様ハ職人にて
修行を積て相得へきなり
▲あふきおとり引中
これなるあふきの。あふあふあるあふ
あるあふあこそ。あふあれあふ
あさあ
此うち合爪にて引事なし修行を積て起るへし

▲小倉擣ぞめの引中
おくらあのたこ。のおんのおんのへ合の。ぱいとよ
りしとあさあさあさきいつくさあく
ゆ。あとんあんあ。いつれあいあんあ
あんあといのおあこれあれ。秋これつらんや
▲あひのて
八ヶんいんいきんきんいきんてん五十九八
▲伊勢おとり引中
あのさいみさまあふあ。いせのおんあそ
あちのめんりりいいあふち也これ
とうかうかうへ

▲寺院より山

[illegible]

▲きけばなるふし

やふをすけをさあやあん[illegible]あを。きい

まくくいのとをゑ。ゆくさ

あ。あやあいきいさすてゑとをせて

▲いろくぶし

ころくつい[illegible]をつんころく。ゆくく

あやくちゆるくあふんころく。すゑを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

▲きくらふし

きくあかあゑ。きをあらあゑこをいてゆ

あああああんゆくいのゑゆるふりそをゑゆら

やゑいあいあるああふりいそをゑゆゑ

ゆくゑのゑんゑさいくほきのいの

ゆをゆるいくろいくいろでゑいくあくゆ

ああああん

▲廓おもりの
うらうらこらの。世にもきてまつしい川はあ。よことと
小たつまちくし。おとこをやしあなしらしなはそれよこと
とこそふ。おつまちくなことをたしあねしし

▲あひのよ
おちよてのゆめくいふあれしそらりやるあひるよ
めかりかりせてかられりやととの乃をまるあ乃
いいまそなくんせんでしてしかまさそれやよ
まちかよさよちちしよるしよあそれよ
やいしてまかさせき

▲れら海

れらさん志よろしやれらさん志よろしやおらさん
志よろしやいなし上らしやれらさん上らしや
いなし上らしや

▲加さくらい
ひいれやあひいしといとなし志しあぬこひといい
てなふたりとふたえやあね

▲かいぞしくるり
おとそしいろそろいとさあやあなめとるら
ふあるとつしきいせしかとり志川らちるあ
よりいおとふひとふいあしあをしそなまよとを志
乃あやあらいあらやしやしせえんし

これなる事もかくのごとくなれども川かの
此都も手のかるもあり出来不能なれば清ハ志すへし
八橋のくミ乃名
ゑてんらく これハ古楽の名 天下泰平 梅がえ
心つくし 桐壺 すま
雲乃上 羽衣 うす雪
かゝかん 雲居あふ 新曲
此ハ以上て十三くミのうちに十三つゝあるへし
ゑてんらくハ七五の二十五の此筆乃くしくも相応して
中にも雲井乃曲ハ太さ不及し十三年

糸竹初心集下巻

三味線乃事

抑日本に三味線を弾き初事ハ文禄乃頃なりし。
石村検校と云ふ人琉球のくにゝ渡りけるに用ゐ
弾ちやうあり琉球の島にわたりけるに鳴子
ほうくといふ物をえて京に帰り初てひきはじめける
尾に落りこの事を川にすれバからと改めて石村
を弾きし後琵琶を習しあるひハ為事を中にし
三ハ三のおとし三の糸ハ川のあらハ二調子をしく
あらくあそびあそびとたへて雨のあるものハ
此後ハ吉野の名を雨につるべらへいかといふてあそびの

此事しと合ね候が、それから人いかのかく声のうの事
又もちかひざる故、三絃を延人の為ニ。此門の琵琶法
師と。家を道具乃名ハ。門の人といふ。三線を将来糸
とゝ持ありし、琵琶と改めし。此三味線を作り出せり
琉球の蛇皮をはりたる三味線を。平家をうたひしが。其後ニ
り三味線を作りだしたる。猫の子の皮をはりて用ゆ
只ハ虎の皮なりしを、其後三味線を作り。出て虎皮ゟ
山野井検校作り出し。世ニ弘めたる糸乃あはせやうハ
これも一二ハ琵琶乃ごとし。三の糸ハ。琵琶乃四の糸
調子なし。ちやうすはとのう作る。其後ちうの門人
ざらんとの事

一琵琶乃調子ハ。先黄鐘調子ニ合せる。此糸
時ハ。一ハ黄鐘糸ニ合せ。二ハ一越。三ハ平調。四ハ一乃ごとく
調子なし。又盤渉ニ合せん時ハ一ハ盤渉。二ハ
平調。三ハ双調。四ハ一乃ごとく調子也。のこる調子
准之。琵琶の糸にあはせていろいろと大廣なり
作へのこと也
一上京石上
一流泉啄木
一玉樹三女
此玉樹といふ曲ハ。石上曲といふ作りたる。秘かと成人
こつきとらんかへ。此中一曲門人へ伝ふる。秘事也此曲

[illegible]

一三味線の習ひ中人の門よりわたしたちの持
参し糸のおとをきくべし或ハ音を記さしむ
こをこゝろ覚るがかんようなり　たとへハ
音をかんとおもふ。考ひくらるゝ物を手ハ書
かるべし。除ることなるものを仕てハ書出すべ
や。三味線をこれハ人と覚ぶべしてハ
三味線をこれハ[illegible]

まハいをあはせるなり数せんなり
一糸をとりたるものハ初ハ人あるをてをらふ
べし。但調子をこゝろハ糸をぶくあるまゝ
さるこゝ。糸のよく合ふ時上ニ方ハ一寸ばかり糸ニ筋かゝふ
筋をなすべし。あゝ[illegible]同役なるをあ
ばすべし。糸[illegible]すこゝ
筋のこゝ[illegible]。一調すちゝふとゝ光をしたゝ
ふ[illegible]。又毎のあて[illegible]調ちゝふ
ふのこゝ。毎のこゝ[illegible]
同[illegible]
引[illegible]

さらんせん声ゝが乃ま

▲一乃糸乃声ゝが

右ハちぶそきをあ(上)ゝ

きハすゝつゝとゝ

さハまゝかゝて上ゝ

かハすゝつゝとゝ

▲二乃糸の声ゝハ

けハちぶそのきをあ(上)ゝ

るハすゝつゝとゝ

とハまゝかゝて上ゝ

乃ハすゝつゝとゝ

すハ寺乃ゝて上ゝ

くハすゝつゝとゝ

▲三乃糸乃声ゝハ

ちハちぶそをあ(上)ゝ

りハすゝつゝとゝ

てハまゝかゝて上ゝ

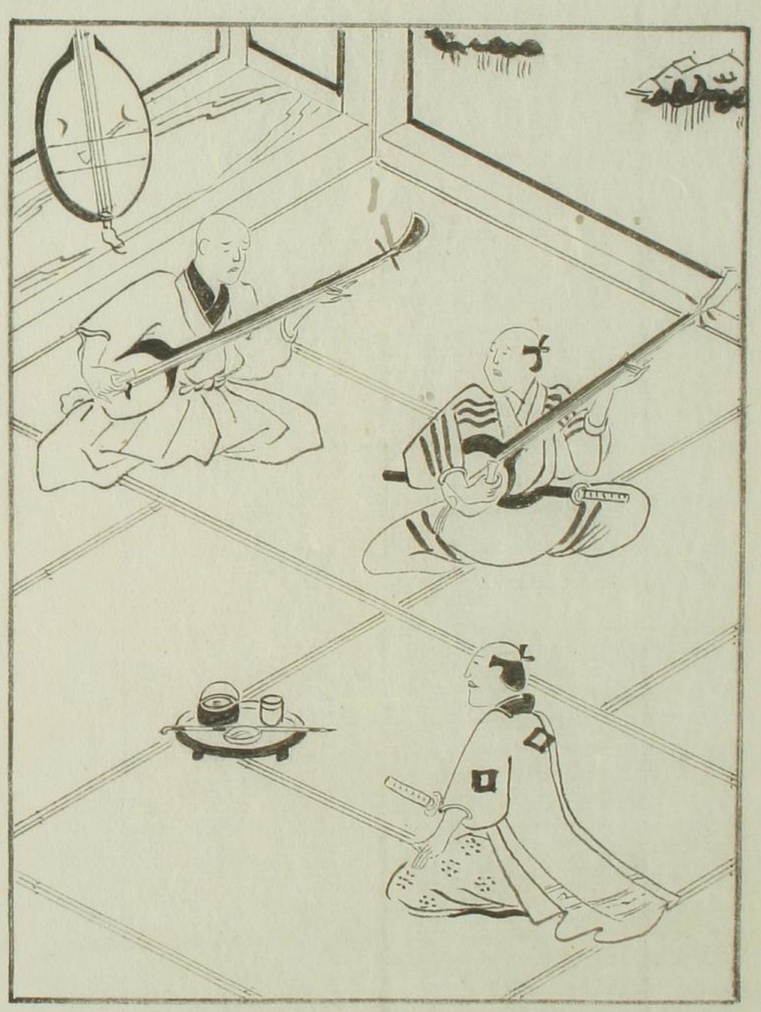
れハすゝつゝとゝ

たハ寺乃ゝて上ゝ

らハすゝつゝとゝ

右あまをゝゝの数十六字をあれをゝゝ

ゝゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ



十六字月

きさつるとろ
すくりちてれたら

▲おかしなあんやあんやあんや

▲かいだ〜〜〜

きいのをんなりさあんふとつとしてさいのをかう
いそろそろ名ちそろそろふるあああんん

▲麻おそろのろ
らふらふらふらはせのををふいりそろあ。
よそろまそろをつま名そろをあのををあるあぬふら
名いそりや

乃ーたかーまし

▲たうざの
をうさそろ者ろしのをはうきそろめをる
さはそろしつるはいそろしをうざは
者ろしつるはいそろしをうざは

近代山井乃井子柳川捨長式近よ石をよせ
癌疫よろ乃ま。天生ろの骨をんて。当代
乃若人こあるのもの乃ろ乃ま中
凡人のきはあ。世よ柳川
流ろふくろ乃をはおろて。ろろのの
外大事ごとおあ名。さふふ中鳥ろ
りふ。大名神事ーろ。をで乃を。世余名
中もらんやといふまはふ。川えぐ記まく学んく
おりふんはふりくろをろくろし

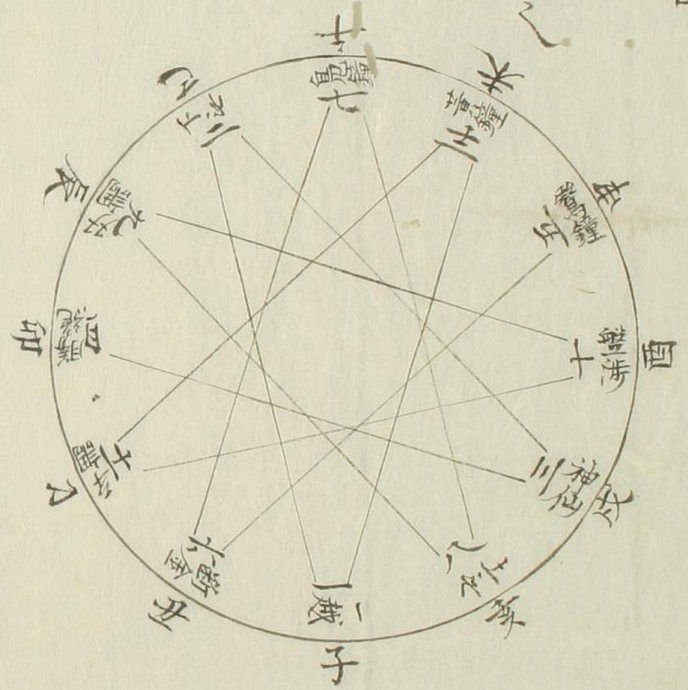
二調子の事。初の圓行一行ゆく。次へ。切る事なして。
四元十二律とぞ。十二律は黄帝乃長下令倫と云
人懶名と云。西の行を切る。後ゆく調を
業とする人と。後へ。ぱ調子と云事は八乃の事ゆ
ぱ。天地の始陽道乃無。こちらく。自然の文
事初を用ゆ。形乃後。地一氏のぬ一氣の流行の事
二十干乃調子と云。天一乃子より生ずる。地二の火
金より生ずる事。天三の木より生ずる。神仙と。四の
乃子と云。猪地と。天七と。地八の
木の。乃調と。天九の金の。雷陽と。地十乃

七の水と一致と云。元十干の調子。日月の調子と。上と
下と成と云。十二調子の次第は。乃一致は子ゆ
者て後は子。数は九。新金は丑ゆ者。後は二。数は八。子調は
寅ゆ者。後は三。数は七。猪地は子ゆ者。後は四。数は六。
乃調は辰ゆ者。後は五。数は五。下無は巳ゆ者。後は六。
数は四。月乃調子。息陰は午ゆ者。又後は数
芸陽は未ゆ者。後は。数八。雷陽は申ゆ者。
後は。数七。盤陽は酉ゆ者。後は。数六。神仙は戌ゆ
者。後は。数五。上は亥ゆ者。後六数四。
日の調子と云事

又野ゆ逆の事。八逆六と云事。

一甲乙の圖

調子の大極もくし



ゆゑなり。一芸年盤羽上鳥新雪猪神下。是を八乃つりことを運氣論羽音丑行よ八を尾ぶて子を生ぶる音ぶ。此調子陰運のうるに。一乃林猪雪新鳥上羽禮年芸。これを六のうるもの

◆又十二月乃調子ぶ。六月陽数の末神仙。二月陽数の末羽調。三月陰数の末鳥鐘。四月陽数の火断金。五月陰数の金雪猪。六月陽数乃下芸。七月陽数の金。八月陰数の年調。九月陰数の上芸。十月陽数の猪。十一月陰数の鶯。十二月陽数の鳥。一歳月の調子見く

◆又人の呼吸声乃調子ハ神仙羽調ハ肝の脈膽の

府まで黄鐘新金府。仙の腦小腸の府。廣多。雲陸。
年間。脚の腦。大腸の府。發汗。膀胱。腎の腦。膝
脛府。鳧鐘。一越。上元。下元。八脚の腦。胃の府。
すこしあり

▲元和生。こしいきるとの。云よ。変化。仙の薬。風
邪。水。ちまで。目。鼻。耳。鼻。肩。人。あ。舌。
人の目。ハ。ん。ぐ。ち。耳。分。ハ。少。ん。ぐ。ち。鼻。肩。人。あ。舌。
味。ん。ぐ。き。あ。し。ぐ。れ。ぐ。も。間。あ。よ。ぐ。く。ハ。少。ん。人。ま。
も。あ。ぐ。ぐ。ぐ

寛文四年甲辰卯月吉日

寺町通

秋田屋五郎兵衛板

投扇例

全

序

投壺とは、むかし唐土聖人の作り給ひし
所にして、中比より人伝へて其わざ
久しく絶えしを、東乃都より物ずきの
たのしみとて、はじめて世に傳へ、ちかき
比ろ、あまねく世人、其事を聞きて
其わざ、ある日、座敷の客人に
強せる事、水鏡に、こゝろ深きかな

いくふりかへり扇を引き投げくい杭に
引かれて扇を投げ乃ちよそ海へぬけさぶく
しぶきをあらしともかくいはしまの
みしたの地にて今一さしの扇をとりて
幾十かつらあれば投げいれども枝のすの
立ちもよ芦ばかりなる右よ左よ波寄るう
ねるく此扇にて投童は袖ひとを思ひ
ちらして頃寛十二年秋紙の包み枝
よりよりくかれよ投げて猪熊を

あり其源義を訪ふとうんよいかの投童の
弾法を見れば調度なるこゝろにて
ひぶ孔雀りしたるうちはんかゆ
十二扇の廣狭
扇の例中いふ
こゝろよ其法たる
形ある者ゆ形
とりは神ゝ法
こゝあるこゝ

投童は新小童

児女をもこれを戒し先帝の事を
偖て所ひさいさ過黄泉のんかと

安永二癸巳年七月廿五日

張蒲城西

投壺会其翁

投式傳

一

抱玉ゝ十二所ハ壺ニ土ハ月数ゝ寄ハ投い
ゝ物ゝ投ハ人ゝ持合ゝ投ゝ投
序ハ間ゝ四番ゝ投ゝ間ゝ四番ゝ間ゝ
投壺ゝ投ゝ投ゝ合ゝ投ゝ投ゝ
ゝ投ゝ先投ゝ投ゝ投ゝ投ゝ
十二ゝ投ゝ投ゝ投ゝ投ゝ
投ゝ投ゝ投ゝ投ゝ投ゝ

一 扇を十二貫文程扇を用ゆゝ地紙を後黄色にして金銀ふき散らす

一 的の事銀箔にて方五寸ばかりとして折帽に似たりこれを書くに西面乃出ばかり

一 席を色紙二枚と為て賓は右の方に主人は南面の席にて考

一 初投書投るまゝ用捨なく投るうち甚初投書投る内和歌の書紙を投てとる

三扇書投度ゆゑ二扇を度毎の度二扇

とし上七扇ある時も初束同扇乃中ハ四

五扇書度ゆゑ都て十二扇となる

又初束ゆゑ弾紙中ハ度毎十扇あり

とする初扇ハ度毎五扇に加へ

中五扇と成ることハ初束同扇に度毎

五扇とこゝ都て二十扇に当るなり

余ゝみれ共ゆゑ

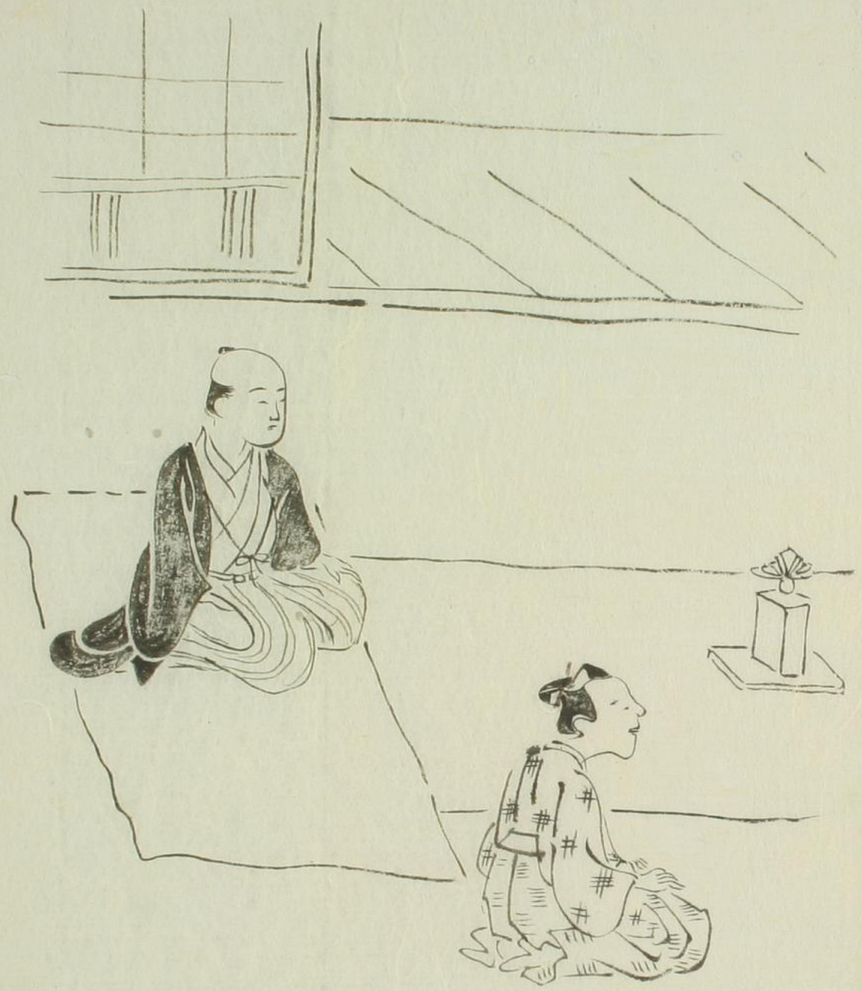
但し神事ハ中ノ扇ニ而かくれ常の座
ゟ出ル又神事ハ同し中ノ扇ニ記録の
例ハ其ゟ可ト書へし

投扇興之記

散、島筐散富、散、散秋　右誰
散散、、幸、筑散秋、、散　左誰
久方ノ月ノ中ノ山ノ桂ハ花ノ咲ケル

右三十七扇
左三十九扇　勝

右ハ初ノ扇ハ徳山ノ扇ニ
初投ハ山蔭ノ扇ニ七扇ハ山ノ
山ノ月ハ山ノ扇ニ事扇ハ
隙ノ扇
但し神事ノ事ハ過扇ノ事ハ
注ニ書ス山ノ月ハ但し神事
ありて不興ノ事ハ書ス



かりの宿乃庵

十二扇

秋の風ふかりそめしを[illegible]

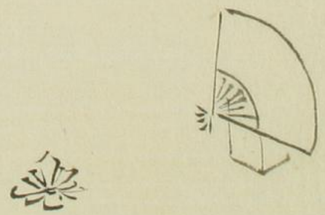
[illegible]

[illegible]

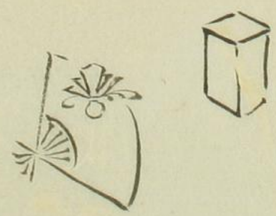
[illegible]

御幸

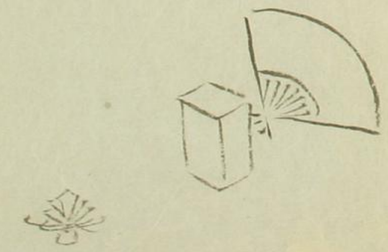
十一扇



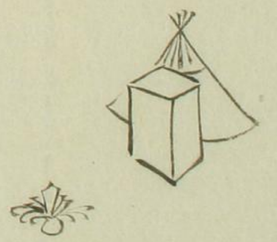
十扇



九扇

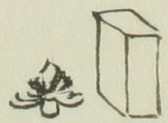


八扇

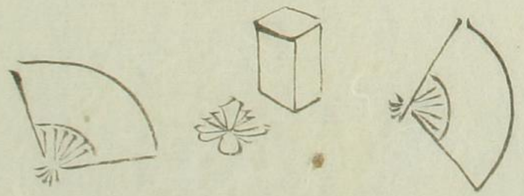


七扇

六扇

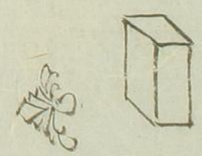


五扇

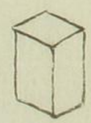


四扇

三扇



二扇

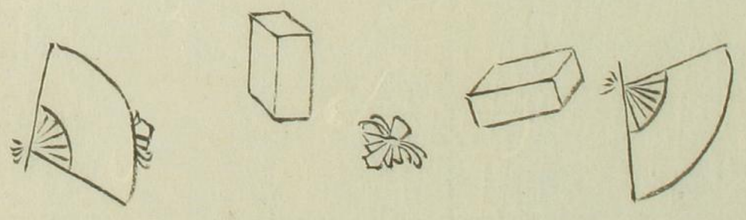


一扇

右十二扇を磨き称なり

過料

三扇



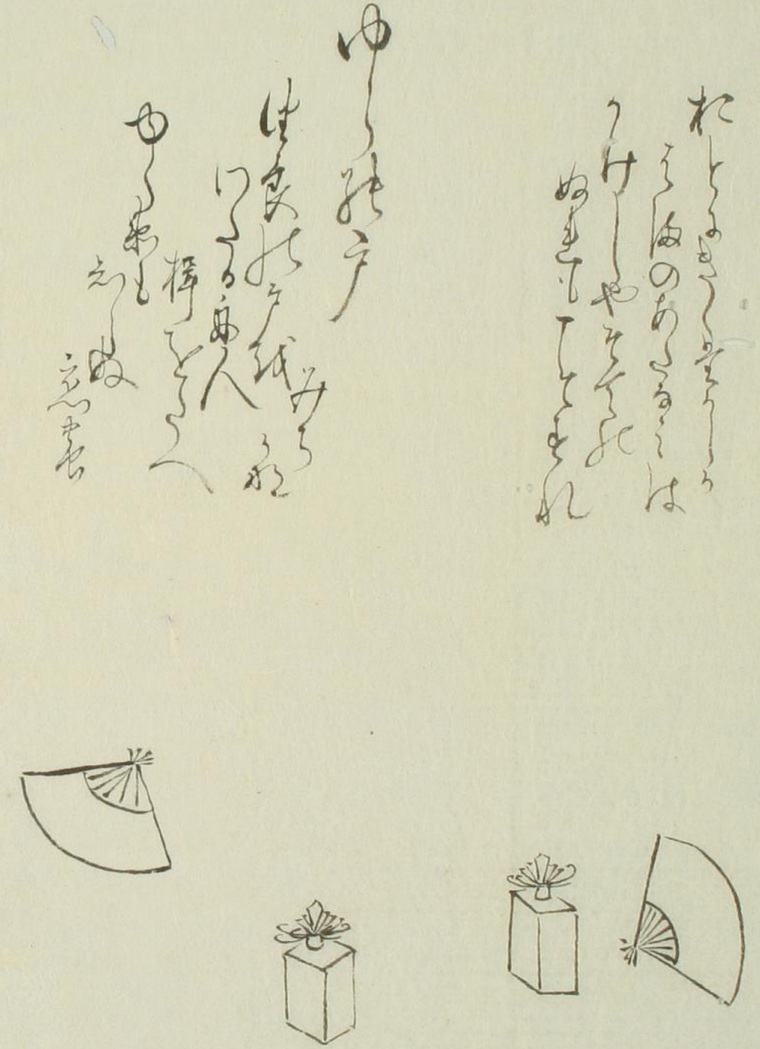
同

二扇

同

一扇

不中扇



小引

近間投樂齋其扇先生欲覺晝寢睏將扇投枕恍惚焉興投扇戲使小童兒女習之余鑑其式驚歎曰寔是可謂精巧特非幼童雖則壯少之士酒宴設催即興之珍戲也誰不弄之哉今也將此戲傳四方使雅友入此遊門則其勞似不費其功非莫大耶唯錄其大槩為筌蹄之耳然御幸筑波

富士三笠之屬俱有扇與的居形正
歪則分之而為上中下三品聊可有
褒貶乎但此等之增減翫者上達之
后猶更有改正則吾儕之悅亦甚焉
仰而俟之而已

安永二年癸巳季夏　洒落齋